



認定看護師のご紹介



〈集中ケア認定看護師〉

はやし あきら 林 晶
おしかわ あさみ 押川 麻美
あべ ともこ 安倍 朋子

集中治療室で治療を受けている患者さんは、全身状態が非常に不安定であり、ときに重症化してしまうことも稀ではありません。集中治療室では、医療機器や生命維持装置により、患者さんの循環や呼吸の補助が行われます。そのため、人工呼吸器を装着することによる肺炎や安静に伴う廃用性症候群（筋力の低下や起立性低血圧など）などの二次的合併症が起こりやすいといわれています。このような二次的合併症を併発すると、集中治療室での治療期間は延長し、入院前の生活行動（歩行、食事、入浴など）を取り戻すことが非常に困難となります。

私たち集中ケア認定看護師は、患者さんの全身状態を観察しながら病態の変化を予測し、重症化の予防、そして早期回復に向けた看護ケアを行っています。

1. 病態変化の予測と重症化の予防

私たちは、患者さんの血圧や脈拍、心電図、呼吸状態をはじめとし、手足の浮腫、意識状態など、全身の状態を総合的に観察し、患者さんの状態を見極め、異常時の早期対応を行っています。また、その日の患者さんの状態を医師とともに話し合いながら最適な看護ケアが提供できるよう努めています。

さらに、全身状態の重症化予防にも取り組んでいます。例えば、人工呼吸器を装着している患者さんがご自分で呼吸ができ、人工呼吸器を一日でも早く離脱することができるよう理学療法士とともに呼吸訓練を実施しています。また、肺炎予防のための口腔ケアや体位変換、誤嚥防止のための嚥下訓練も実施しています。安静による筋力の低下を予防するために、ベッド上で患者さんが自分の力で手足を動かせるよう支援し、患者さんご自身の持つ力を最大限発揮できる援助を心がけています。

2. 日常生活動作の再獲得に向けた支援

安静により低下してしまった患者さんの手足の筋力を入院前と同等もしくはそれに近い状態に戻すため、患者さんが自分の力で座る、立つ、歩くなどのリハビリテーションを理学療法士とともに段階的に実施しています。一度全身状態が重症化した患者さんは、リハビリテーションを実施することにより再び呼吸や血圧が不安定になることがあります。私たち集中ケア認定看護師は、患者さんの状態が再び悪化しないように、血圧や呼吸状態を見極めながら、最適なときを見計らい、最適な方法で安全にリハビリテーションが実施できるよう努めています。

3. 患者さんご家族の心の支援

集中治療室で治療を受ける患者さんは、生命の危機にさらされている上に、様々な医療機器に囲まれた特殊な環境の中で、多くの不安や苦痛を抱き、精神的に不安定な状態となります。これは、ご家族も同様です。私たち集中ケア認定看護師は、患者さんやご家族の心情に常に寄り添いながら、不安や苦痛が少しでも和らぐよう心の支援を行います。

治療や看護に関する疑問や悩み、困っていることなど、いつでも私たちにご相談ください。



集中治療室で、患者さんの全身状態を観察し、異常を早期に発見します(林)



看護の質の向上をめざし、病院内で研修を行っています(押川 安倍)



福岡大学病院
院長 井上 亨
いのうえ ともる

新年のご挨拶

新年明けましておめでとうございます。

昨年 2016 年はノーベル生理学・医学賞を東京工業大学の岡良典先生が受賞されました。2014 年には物理学賞を日本人 3 名が受賞、2015 年には生理学・医学賞と物理学賞のダブル受賞となり日本中が沸きました。これによって日本人のノーベル賞受賞者は 25 名になり、日本人として誇りに思います。当院も大学病院として医学研究から得られた様々な情報を発信していく所存です。

新しい年を迎えるにあたり、皆様に福岡大学病院の現状と新たな取り組みについて述べたいと思います。

福岡大学病院は、1973 年 8 月 4 日に開設され、地域医療の中心として社会に貢献してまいりました。2011 年 1 月 4 日には新診療棟がオープンし、一部の外来と病棟部門が移転しましたが、本館は老朽化しており市内の大きな病院と比較しても古くなっているのは周知の事実です。当院は地下鉄福大前駅から徒歩、都市高速も近く利便性に優れています。この立地を生かし災害拠点病院としての機能を果たすためにも病院の全職員が一丸となって早急な本館建て替えに向けて努力しているところです。

当院では地域の医療機関との連携強化を目指し、「断らない医療」の実践を掲げ日々取り組んでいます。周辺地域からの救急患者応用の救急ホットラインを開設し、同時に救急隊からの搬送依頼も断らない対応を目指しています。これは総合診療部による二次救急(総合診療部 ER)の強化とトリアージナースの導入が大きな柱となっています。総合診療部 ER が主に救急隊からの搬送依頼を引き受け、トリアージナースは各医療機関から診療依頼を一括して対応することによりスムーズな受け入れが可能となっています。このように地域に対して高度で専門的な治療を提供し特定機能病院としての使命を果たしています。

さらに昨年より、当院で診療を終えた患者さんやご家族の方へ、地域の「かかりつけ医」の紹介チラシを新館 1 階エスカレーター付近に設置しています。現在、90 箇所以上の医療機関のチラシがありますので是非ご利用ください。

また、周辺の医療機関から受け付ける紹介患者さんの事前診療予約手続きの終了時間を 16 時 40 分から 18 時までに延長し地域のニーズに応じています。

最後に、当院は大学病院として博多駅クリニックと連携して国際医療に取り組んでおり、外国人コンサルタントの協力を得て、検査、治療を希望される外国人患者の受け入れ体制を整備しています。これに合わせて、国際医療に必要な書類や当院公式 Web ページの中国語、英語版を充実させました。今後は受け入れ可能な診療科を増やし、なるべく多くの科で診療ができるように推進していきたいと思っています。

当院の理念である「あたたかい医療」を今まで以上に実践できるよう職員一同一丸となり日々の診療に取り組みたいと思います。





臨床研究支援センターのご紹介



臨床研究支援センター
センター長・教授
の だ けいた
野田 慶太

●センター長ご挨拶

大学病院は、高度な医療を提供するとともに革新的な新規医療を開発する使命を負っています。当センターは、新薬・医療機器を国に承認してもらうために行う臨床試験(治験)を支援するために2001年に設立され、2009年には厚生労働省から治験拠点病院に指定されました。治験は、国の法律で安全性及び信頼性の確保が求められており、当院もそれに従い厳格に治験を実施しています。

治験は、対象疾患となる患者さん(被験者)の協力が不可欠です。センターも市民講座等を通じて治験の啓発を行うとともに、地域の医療機関と連携して治験の推進を目指していきたいと考えています。

●治験実績

2009年に治験拠点病院に選定された後、病院全体で日々治験推進・啓発を実践しており、2016年は、11月1日現在、新規治験24件84症例、継続治験79件381症例と多くの新薬開発に取り組んでいます。

(1) 終了した治験実施率(製造販売臨床試験を除く)

年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度
件数	26	17	24	32	23
実施率%	80 (128/160)	85 (82/97)	76 (90/118)	79 (110/139)	67 (86/129)

(3) 国際共同治験・医師主導治験・医療機器治験の受入状況の推移

年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度
国際共同治験	4	6	4	10	13
医師主導治験	1	2	-	2	-
医療機器治験	-	-	1	3	1

(2) 新規治験受入状況の年度推移

年度	平成23年度		平成24年度		平成25年度		平成26年度		平成27年度	
	件数	症例数								
契約数										
合計	23	135	40	196	27	189	36	174	38	130



臨床研究支援センタースタッフ

●主な募集中治験

現在募集中の主な治験は、成人T細胞白血病/リンパ腫(ATL)(腫瘍・血液・感染症内科)、冠動脈疾患を合併した心不全(循環器内科)、重症肺気腫病変優位型 COPD(呼吸器内科)、塞栓源不明の脳塞栓症(神経内科・健康管理科)、化膿性汗腺炎(皮膚科)等があります。当院では地域のかかりつけ医からの紹介で治験に至ったケースがありますので、気になる治験がございましたらセンターへご相談ください。募集中の治験情報は当院のホームページ(治験・臨床研究について)に掲載していますのでご確認ください。

●治験コーディネーター(Clinical Research Coordinator: CRC)

私たちは、臨床研究や治験の支援を行っています。主に患者さんへの治験説明補助やスケジュール管理、服薬指導や症状確認をしています。また、医師のサポートとして治験に参加できる患者さんのリクルート補助、診察への立ち合い、治験に必要な情報収集、製薬会社へ提出する報告書の作成などの支援も行っています。

患者さんや製薬会社、医師をはじめとする院内スタッフの間に立ち、患者さんが安心して治験に参加していただけるように、全体的なコーディネートを行っています。当院では、看護師、薬剤師の資格を持った6名の院内専属スタッフと業務委託した会社から派遣されたスタッフがCRCとして働いています。



治験コーディネーター(CRC)

●福岡大学病院 市民・医学講座

市民の方々に治験のことを知っていただくことを目的に市民講座を毎年開催しています。平成19年度から開催し、平成25年度までは講演会形式で治験のことや最先端の医療について紹介いたしました。平成26年度からは「遊びにおいで!! 病院で働くプロ達が大集合 ~わくわくお仕事体験会~」と題して、子供に医療を体験してもらいイベントを開催しています。昨年の治験コーナーでは、白衣を着用しCRC役になって、同意補助説明を体験してもらいました。今年度も医師、歯科医師、薬剤師、看護師、放射線技師、臨床工学技士、言語聴覚士、臨床検査技師、栄養士、理学(作業)療法士、統計家、CRCの体験イベントを2017年3月19日(日)に予定しています。興味のある小・中学生の方はご参加ください。詳細は当センターのホームページに掲載いたします。



昨年度の子供対象お仕事体験

治験表彰

大学病院において治験を実施することは社会的責務である一方、医師にとっては過酷な業務となります。福岡大学病院院長は、当院の治験に多大な貢献をされた医師に敬意を表し、年度表彰を行っています。下記に2015年度の表彰医師を紹介し、「治験に対する思い」を述べていただきました。



神経内科・健康管理科 部長・教授 坪井 義夫

神経内科疾患において、近年アルツハイマー病、パーキンソン病、脳卒中の再発予防等の治験が増えています。神経内科学教室としても大学のあるべき姿としてこれら治験に積極的に参加をしています。一方、医師主導治験は稀な疾患や地域性の高い疾患で行われ、私どもでもHTLV-1関連脊髄症、プリオン病の治験への導入準備をしています。治験は医薬品の開発に必要不可欠であり、安全性、正確性を求めて臨床技量を高め、治験コーディネーターとの連携でその煩雑性の解決を図り、患者さんが安心して参加いただけるような治験体制を継続していきたいと思っております。



皮膚科 部長・教授 今福 信一

新薬の開発に臨床試験(治験)は欠かせません。治験は、病気と薬剤の特徴をよく把握して正しい評価をし、副作用に十分な注意を払う必要があります。経験がとて大切になります。当科は既に数多くの治験に携わり、患者さんの協力の下に新薬を世に送り出すお手伝いをし、その経験を積んできました。よりよい治療を見つけて行くことは私たち大学で働く医師の大事な役割のひとつであり、これからも有望な薬剤の治験に尽力していきます。



神経内科・健康管理科 医師 合馬 慎二

高齢化の進む我が国では、認知症患者数は増加の一途を辿っています。アルツハイマー病においては原因物質であるアミロイド蛋白を除去する治療薬の開発が進んでおり、我々神経内科でもアルツハイマー病の根治的治療薬の治験等を行っています。治験への参加で最先端の治療を受けることができ、ご本人そしてご家族の方が「認知症の治療により希望を持っていた」そのような思いで日々の診療を行っています。



皮膚科 医師 伊原 穂乃香

皮膚科は治験が多く、希望されて受診される方もいらっしゃいますが、有難いことに患者さんにご協力をいただいて参加してもらったことも多いです。治験薬が無効であったり、副作用が起こる懸念もありますが、病気で苦しんでいる多くの方たちを救うために役立つことにもなると思っています。患者さんや治験コーディネーターの方たちのご協力により、このような賞をいただくことができました。感謝の気持ちを忘れずに日々の診療に従事します。



皮膚科 医師 古賀 文二

近年、皮膚科分野では生物学的製剤の治験が多く、主に乾癬、掌蹠膿疱症、アトピー性皮膚炎などが対象疾患となっております。副作用が懸念される薬剤もありましたが、治験を経たいくつかの薬剤は、既に日常診療において比較的安全に強い効果を示し、多くの患者さんから喜びの声をいただきます。治験は、あくまで未来の患者さんのために行う臨床試験であるという認識を忘れぬよう、今後も真摯な気持ちで遂行していきたいと思っております。

治験関連部門紹介

治験は、質の高いデータ、治験薬の厳格な管理及び被験者の安全確保が求められます。そのため、病院全体の協力体制が不可欠です。今回は、これらを支えている主な部門の代表者にその業務についてお聞きしました。



薬剤部 部長 神村 英利

調剤室とは独立した治験薬管理室で治験薬を保管・管理しています。治験薬には厳格な温度管理が必要なものが多く、保管庫内の温度を常時モニターしています。また、被験者の来院日には治験薬を調剤し、コーディネーターに手交します。そして、治験責任医師等から依頼されれば、治験薬および併用薬について服薬指導もします。



看護部 部長 中川 朋子

新しい治療に期待と希望を抱きつつ、認可されていない薬剤投与や治療に対する不安もある中、治験を希望される患者さんが、安心して精度の高い治験を受けられるよう、看護師は治験コーディネーターと情報を共有しサポートしております。



放射線部 技師長 田中 稔

治験対象となる画像診断は、血管造影・CT検査・MRI検査・骨塩量X線測定検査など多岐に渡り、37件もの治験の画像部門を放射線部が担っています。特に最近では定量的画像評価が多く求められる傾向にあります。このような中で撮像プロトコルを詳細にとり決め、誰が検査を行っても一定の画像評価が得られるようにしています。



臨床検査部 臨床検査技師 有泉 マユミ

治験においては、数多くの検査とその精度を要求されます。私は、その業務をマネジメントする治験担当に任命されています。日々の業務としては、中央採血室にて、治験に参加された患者さんの採血と検体の処理を担当しています。採取した血液などの検体は治験ごとに決められた手順で処理し、検査機関に提出します。採血の際は患者さんのご負担が少しでも軽くなるよう心がけています。